

社側の發表する所に據れば、就業申込者は著しく増加し同日正午までに造船所に於ては造船千四百十九名、造機千七十二名、修繕四百五十九名、總務二百三十名、合計二千五百十名にして全数の二割七分に當ると稱せられたり。更に内燃機及電機に於ても夫々申込者續出し相當の自信を得たれば、職工の大勢と川崎造船所休業明け後の形勢を徐に觀察考究しつゝ、ありし會社側は、武田會長以下各幹部協議の結果、愈々二十九日より作業開始と決し、同日午後「社則を遵守し誠實に就職を希望する者は入場を許す」旨全職工に對して夫々通達したり。

之に對し最後に總辭職とまで決心の臍を堅めたる爭議團に於ては同夜の最高幹部會に於て種々對策を協議の結果、一層團結を強め目的貫徹に邁進すべく種々の手配を整へ會社の切崩し防止に努力する事に決す。

七月二十八日、工場附近其他要所々に貼出されありし休業繼續の揭示は改めて左の作業開始の揭示と貼り代へられたり。

掲 示

休業中の所明二十九日より現行社則を遵守し誠實に就業を希望する者は平常通り入場相成度候也

大正十一年七月二十八日

- 三菱造船株式會社神戸造船所
- 三菱内燃機株式會社神戸工場
- 三菱電機株式會社神戸工場

一方爭議團側にありても午後五時より西柳原第二互助俱樂部に最高幹部會を開催、會社側の始業發表に對して其の對抗策を協議し、投票に依りて決する事となり、其の結果最後の一人となるまで踏止りて對戰する事を決議し、翌日よりは會社への出勤者に對して法に觸れざる範圍に於て牽制を試みる事とせり。

職工軟化の勢は如何にしても阻止し難き事なりしが、尙職工大多數の意志は頗る鞏固なるものあり、同日三ヶ所に開かれたる大演説會（補機工場主催の南榮座、電機工場主催の和田席、造船主催の西尻池三國館）は何れの會場を覗きても「最後の一人迄戰へ」と壇上に叫ぶ辯士の熱辯に拍手喝采を堂々搖がすの大益況を呈し居たり。

七、祈願運動

頽れ行く、味方の形勢を見て躍起となりて結束運動に努めたる川崎爭議團本部にては、軟化者續出の趨勢は委員等の紛骨碎身的奮闘を以てしても如何とも爲し得ず、而かも官憲威壓の手は益々激しく